

## 平成25年度 第1回石狩市民図書館協議会の会議 議事録

平成25年8月27日（火）午後4時より  
厚田支所2階会議室

出席者	石狩市民図書館協議会	会 長	樟山 行彦
		副会長	谷口 初江
		委 員	樋口 博
			平山久賀子
			矢野 誠
			河村 芳行
		傍聴者	0名
	石狩市民図書館	館 長	百井 宏己
		副館長	丹羽 秀人
		副館長	板谷 英郁
		事業兼奉仕担当主査	寺尾 陽助
		奉仕兼事業担当主事	吉岡 律子
	砂丘の風資料館	課 長	工藤 義衛

### <会議次第>

1. 会長挨拶
2. 館長挨拶
3. 見学（厚田小学校あいかぜとしょかん）
4. 議事
  - （1）平成24年度の利用状況
  - （2）平成25年度事業計画
  - （3）文化財保護審議会
  - （4）意見交換
    - ①
    - ②
5. その他
  - （1）図書館交流事業
  - （2）はだしのゲンについて

### 1. 会長挨拶

**樟山会長**：皆さま、こんにちは。時間になりましたので、ただ今より平成25年度第1回石狩市民図書館協議会を開催します。よろしくお願ひします。先ほどあいかぜとしょかんを見学させていただきましたが、大変素晴らしい充実した図書館となっていました。全国の公立図書館の状況は、天気にならると曇りというようなことが言われております。なんらかの課題を抱えながら図書館を運営しているのだと思います。石狩の図書館においても、今日の審議の柱にもなりますけれども、いかに多くの方に利用していただけるかという協議もしていきたいと思ひます。少しでも曇りから晴れ間がのぞくような話し合いができれば幸いだなと思ひますので、よろしくお願ひいたします。では、百井館長からご挨拶お願ひします。

## 2. 館長挨拶

**百井館長**：あらためまして皆さまこんにちは。いつもながらお世話になっておまして、ありがとうございます。本や図書館に関する話題は一年間の中でも、先だつては、例えば芥川賞や直木賞などそういった話題を提供していただいて、私たちが努力しなくても世間様が興味をもつていただくということでは、非常に良い機会をいただいているなと思ひます。または昨今、口頭でも話題になっておりますはだしのゲンについてです。例えば、週刊誌に未成年の方が出ている記事があるというとその週刊誌の取り扱いが急に話題になったりするのと同じようなレベルで、もしはだしのゲンが論じられているのであれば、どのように捉えればいいのかとか、重い軽いというのを迂闊に判断することにはならないのでしょうかけれども、ずいぶんと考えさせられるなあと感じております。いずれにしても、そういった時だけ図書館が話題になったりするのは、ある意味機会をちょうだいしながら私たちは日々努力することが大切なのかなと思ひます。

会長のお話の中で、公共図書館は全国的に曇りということをおっしゃいました。そういう意味では、石狩市の図書館や図書館行政も全くの順風満帆ではなくて、課題を日々考えながら更に良くしていかないといけないなというふうに思ひます。一般的な言葉で言うと、安定とか定着という意味では、わたくしたちは自負を持って石狩市民図書館は良い面もありますとそう申し上げますが、一方でマンネリとか、飽きられているという部分も否定できないと思ひます。今後、基本的な図書館の機能や改善すべき点というのはもとより、新たなサービスや石狩市の特色という意味合いも加えて、進めていければいいなというふうに思ひますので、今日の議題の中にもありますけれども、皆さまから更にご意見などをちょうだいし、それを反映させていただきたいと思ひます。どうぞよろしくご審議お願ひいたします。

**樟山会長**：ありがとうございました。それではさっそく議事に入りますけれども、次第に

のっとりまして昨年度の利用状況および今年度の事業計画について、事務局からご説明願います。

4. 議事 ①平成 24 年度の利用状況について：(寺尾主査より報告)  
②平成 25 年度事業計画について：(吉岡主事より報告)

樟山会長：ただ今、2点事務局より説明がありましたけれども、ご質問やご意見等がございましたらよろしく願います。

矢野委員：2013 年統計の部分について、平成 24 年度の実業計画にある宅配サービスの実施件数等の数字を教えてください。

寺尾主査：統計部分の 7 ページに掲載しています。24 年度の宅配サービスの貸出点数は 22 点、貸出人数は 11 人という結果になっています。

樟山会長：他にありますか。

矢野委員：もう一つよろしいでしょうか。2013 年度の登録者数について先ほど説明していただいたのですが、利用者の資格について、要するに 3 年間利用がなかったら除籍するということですが、これは利用者が分かるようになっているのでしょうか。利用案内などに書いてあるのでしょうか。

丹羽副館長：利用者には伝えておりません。普通、公共図書館は毎年とか 2 年おきに更新というのをしておりますが、石狩市民図書館はそれをしておりませんので、3 年以上使っていない方については、しばらくご利用がなかったようなのもう一度証明書を提示いただけますかというお願いをして復活させています。そういう意味では、自分の登録がなくなっているのか、保持されているのか利用者はわからないと思いますけれども、コンピュータ上で分けるというような感じですので、そのカードをお持ちになって図書館にいらした場合は、すぐ復活し利用できるようになっています。

樟山会長：それでは、後ほど意見交換の時間もありますので、先に進めます。次に、文化財保護審議会の答申について事務局よりご説明いただきます。

4. 議事 ③文化保護審議会の答申について (文化財課：工藤課長より説明)

樟山会長：ありがとうございます。私の方から質問させていただきたいのですが、郷土資

料の保存・展示ということで、かなり幅広いものが対象になると思うのですが、石狩市として、博物館の建設につなげていくという構想はどのようなのでしょうか。

**工藤課長**：答申の中で、施設上の問題が非常に多いということで、そのことを避けて通ることはきっとできないというような趣旨を答申としていただいております。それから、どのような施設や考え方が必要かという点で、図書館との連携というのは非常に重要です。現在、石狩市の全人口の9割ぐらいが花川地区に集中しているのですが、人口の集中地域に近いところで、なおかつ人的な資源や施設のもしっかりしているというところを中心として考えていくべきなのではないかと思います。答申をいただいただけでは意味がありませんので、方向性の中で今現在、特に中で決定させていただいているところです。

**百井館長**：具体的なところは今課長がおっしゃった通りなのですが、石狩市に博物館構想なるものがあるのかというお尋ねについては、具体的に言えば、例えば市には石狩市の総合計画とか財政的な計画とかいくつか計画があります。教育委員会には教育委員会の計画がありますけれども、それらのレベルで考えると、明確に博物館を建てるという計画は残念ながらありません。課長が冒頭の説明の中で申しあげましたように、教育委員会の計画においては、こういった分野について十分検討して、その結果を具体的にしていくという段階にあります。もとより、教育委員会では博物館だけではなくて、公民館それから学校も今後どうしていくかというのは大きな課題になっていますので、少なくとも個々に対応するのではなくて、機能も含めて複合的にそれをどうしたらいいのかというのを具体的に市に掛け合って相談できるように、具体的な行程表をもって進めていくという段階に入っています。皆さまからの応援の意見やメッセージがありますと、それをわたくしたちの後ろ盾にして色々な方面で発言させていただきたいと思いますので、ぜひメッセージをいただければと思います。よろしくお願いします。

**樋口委員**：答申を見て、これをもし実現するとしたら、場所は図書館のそばの広い広場かなとか考えていました。縄文に凝っているのですが、そういう資料などを皆さまが見られる場所をぜひ用意してほしいなと強く思っています。色々な資料館などを覗いてみますとけっこう工夫してまして、例えば、閉校した学校なんかも利用して作っているところを見たりすると、石狩でもひよっとしたら紅葉山小学校などを利用できれば良い資料館ができるのではないかなとも思っています。色々難しい問題があるのかもしれませんが、砂丘の風資料館は狭くて、非常に良い資料館なのですが、もうちょっと広くて、もっと利用してもらえる施設ができればいいなと思います。

**百井館長**：ありがとうございます。

**樟山会長**：建物の話だけだと、あまり注目されないと思うのですが、やはりまちづくりとリンクしておりますので、石狩市もどのようなまちづくりをしていくかという視点で構想を練っている段階ということですので、引き続きよろしく申し上げます。それでは意見交換について、事務局の方からお願いします。

**丹羽副館長**：それでは丹羽の方から、前回の協議会でいただいた意見交換についてご説明させていただきます。

まず、紅葉山 49 号遺跡で見つかったサケを捕る魷（えり）を図書館で展示してはどうかというご意見をいただきました。これは、砂丘の風資料館の工藤課長にも協力をしていただきまして、5月の展示の中で一部分ですけれども、本物の魷を展示いたしました。かなり大勢の方に見ていただけたかと思えます。

次に、50回目なのでサケまつりの49回分のチラシ、ポスターなどがあるとサケまつりの歴史がわかっていいのではないかというご意見をいただきましたけれども、石狩市では最近の数年分しか保存がなかったということで、やはり砂丘の風資料館、あるいは観光協会の方で個人的に持っている方なども探して、ポスター以外のものも一部ありますが、主に古いポスターを集め、また、展示出来るように加工したそういうものを図書館でも公開いたしましたし、今現在、札幌駅のすぐ近くにある紀伊国屋札幌本店の中での展示もしております。

それから、尚古社の古い資料をサケまつりの会場で展示してはどうでしょうかというご意見をいただきました。資料の一部は展示されるようですし、あとは、尚古社はサケまつり会場と非常に近いので、期間中訪れる方もいらっしゃるのではないかと考えています。

続いて、南線小学校に2年前に学校司書が配置されて、子どもたちの貸出冊数が増えたという結果が出ています。緑苑台小学校や双葉小学校についてはどうでしょうかということだったのですが、お配りした表をご覧いただいているように、非常に増えています。倍々ゲームで増えています。これ以外でも、先ほどご説明のありました厚田小学校でも利用が増えているというような報告が出ています。また、八幡小学校に分館から司書を派遣するようになって、やはりこちらでも非常に良い結果が出ております。

次に、高齢者や調べたい人のためにもう少しPRする必要があるのではないかというご意見がありました。まだまだこの点は遅れていますけれども、下半期に向けてそういう方々に向けた選書とか、おすすめしたい本のチラシみたいなものを作っていこうと考えていますし、もう一つは、まちあかりという広く各家庭に頒布されているフリーペーパーがありますけれども、その中に石狩市民図書館のおすすめとかあるいは本の紹介のコーナーをいただけましたので、まずはここから始めていきます。今日その原稿の校正をかけていたところですが、第1回目は2冊の本の紹介と、最近入った本の紹介です。

これはある意味では図書館に來られていない方へのPRとしては図書館がこういう冊子を発行するよりも効果があるのではないかなと思っています。以上です。

**板谷副館長**：それでは、最近図書館で非常に気になっている部分なのですが、貸出点数について、平成18年度をピークに少しずつ減っているというのが市民図書館としては大変気にしているところでございまして、このことについてご意見をいただきたいのですが、わたくしたちなりにその原因というのを分析してみました。

まず一つ目が、人口構造が変わってきているのではないかなということ。20歳未満の人口が平成18年度と比べて600人程減っています。それから、70歳以上が2,000人弱増えているということで、今まで借りていた人が高齢化してきたり、本来借りられなければならない人が減っていたり、という部分もあるのかなと考えています。例えば、今の部分を足して一人10点くらい借りていたと想定すると、25,000点くらいになる可能性も考えられます。それから、児童書の貸出点数が平成18年度から比べると30,000点くらい減っています。一方で、先ほど丹羽が説明したように、学校に司書が配置したところが増えているというのがありまして、やはり30,000点くらい増えています。相殺するとプラスマイナスゼロと言えなくもなく、学校で借りやすくなっているというのは良いことなのですが、本館の部分が減ってはおります。

それから、平成19年度に図書費が2,200万円あったところを1,000万円削って、1,200万円になったというの、もしかすると選ぶ選択肢が減っているということになるのかもしれないなと考えています。今は少し増えて1,400万円くらいになっていますけれども、これは大きい要因になるのかもしれないなと感じています。

一方で、図書館もなかなか予算が増えない中で小さな努力はしておりまして、例えば、夏休みの期間は早くから開館するとか、南分館については今年、30分早く開館するのに加え、閉館時間も30分伸ばしました。

また、視聴覚資料の貸出上限を1点増やして、借りやすくするというのもしたり、研修室の利用が多いのですが、そういう人に利用登録をなるべく呼び掛けるようにしたり、そういうこともしています。また、もしかすると、インターネットが普及して調べることがパソコンを使って調べるといった形態に変わっているということもあるのかなと言う感じもしているのですが、わたくしどもの分析はこのような感じ。図書館も、利用が減っているのにただ指をくわえているだけではしょうがないので、ここから少しでも増やしていきたいなと考えているのですが、そのあたりについてご意見などございましたらいただきたいと思います。

**樟山会長**：意見交換ということで、ただ今の内容を今日の目玉といたします。板谷副館長から説明がありましたけれども、貸出数が減少してそれと合わせて利用者数も減少しているということが数字で出ておりますので、どのようにしたら市民図書館の貸出数、も

しくは利用者数が増えるかというようなことで皆さまからご意見をいただきたいなと思いますのでよろしくお願ひします。どこからでもけっこうですので、いいアイデアを出していただければと思います。

**樋口委員**：身近な人に色々話を聞いてみました。やはり難しい問題だと思うのですが、現在水曜日と木曜日が夜8時まで開館していますが、これを土曜日にしてもらったらもっと利用が増えるのではないかという話を聞きました。それから、高齢者が増えてきて、高齢者というのは朝早く起きますので、開館時間をもうちょっと早くしてもらえたらいいという意見がありました。難しい問題でしょうけれども、検討していただければと思います。

**板谷副館長**：そうですね、図書館の基本的な運営方法というのは、オープン以来あまり変えていないところもありまして、もしかするとそのあたりも、お金に係る部分もありますが、そこはあまり気にせずに、工夫で解決できるかもしれないので、色々なご意見をいただけたらと思います。

**河村委員**：今お話があったように高齢者が増えてきたというのであれば、開館時間を早くするというのは、夜遅くまで開館するというよりも効率的でもっともなご意見だと思います。あと、入館者数と貸出冊数が減ってきているということなのですが、数値で表わさなきゃいけないというのはよくわかるのですが、利用者が増えているのであれば、貸出冊数にこだわらなくても、滞在時間の様子を入館のところで紙などを配って、入館時間と退館時間を記入してもらおう等してもらおうのもいいかもしれないと思います。高齢者の利用が増えているのであれば、滞在時間が増えているのではないかと思います。以前のようにちょっと来て本を借りて帰っていくという形態から、長時間滞在型になってきているのかなと。

**丹羽副館長**：私もこの図書館が開館以来ずっと利用者を見ていますが、完全にこの5・6年で利用者層が変わってきているのを肌で感じています。開館当時、女性の利用がとても多かったのですが、この5・6年、60代と思われる男性の利用が急増しています。そして、この方々は朝来て夕方までいらっしゃいます。河村委員がおっしゃるとおり滞在時間が非常に長いです。この方々は滞在時間が長いので、見ていますと本は読み終わって帰られてしまい、また、あまり動かないので図書館の中にいる人数が減っている感じはあまりしないのですけれども、貸出冊数が減っているというのは、河村委員のご指摘のとおり滞在時間が長い方が増えているために、本の貸出というのをされていかない。ですが、別に図書館の本を借りていかれなくても、そこで読んでもらえれば十分なわけですが、その数字をつかむ手段がないというのがありますので、そういうのはアンケート

トというのも一つの方法なのかもしれませんが、何らかの方法で把握していきたいと思っています。確実に見た感じでは利用者層は変わっています。

**河村委員**：図書館の方でかなり詳しく分析していらっしゃるようで、とても当たっていると思います。滞在時間が長くなったことで、たくさん本を借りていく必要がなくなったとか、人口構成も変わってきているようですし。一つPRの方法としては、今まで貸出冊数というのがすごく重視されてきていて、数字で表れるので図書館の指標として使われてきていますが、逆にいうと立派な図書館で充実したサービスをしていれば、滞在時間は長くなるでしょうし、そこらへんをもう少し何らかの形で捉えて、PRできるようなデータを作る方法を考えるとか、これは予算に影響してくることだと思いますが、新しい本を入れてあげるといったところにも力を入れてみたらどうかなあとと思います。

**谷口副会長**：貸出を増やすというのはかなり難しいと思います。人口の構成や予算の問題もあると思いますし、今はスマートフォンで読めますので、電子書籍も単価も安くなって、いまのところコンテンツが少ないからそんなに普及していないだけで、子どもたちも普通に端末で読むという時代になってきている中で、貸出の数だけで図書館の利用というものを考えていいのかなと感じます。むしろ、顧客満足度というのでしょうか、ここの図書館に来て良かったとか、税金を払って良かったとか、そういうふうに見えるところが出た方が良いと思います。だけど、それは数字にはならないのですよね。議会なりなんなり外の方に説明が難しいのかもしれないのですが、そこを何とか伝えるとか、市役所って5時で閉まりますよね。市役所には色々な部署がありますよね。聞きたいけれど聞けない。これはある意味ではレファレンスとして答えられる可能性はあると思います。今公共図書館は市民のセーフティネットとも言われるようになってきていて、多様な人のニーズに応えることをレファレンスとして受けるということは、図書館員としてはとても大変だと思うのですが、そういうことを考えることによって顧客満足度が高まり、来る人が増える。すると、図書館って便利だ、図書館ってこんなこともやっていたのだ、本もあった、雑誌も新聞もあった。というところから利用が増えるということも、やはりこれから考えていかなければ、ただ貸出冊数が増えたとか減ったというだけでは、運営のやりくりがつかないのではないかと思います。曇りの図書館というのは、みんなそういう時代に入ってきているのではないかという気がしています。

**矢野委員**：皆さまのお話のように 大学図書館も入館者、貸出冊数ともずっと減少傾向ですね。一方で、黙ってみていてもしょうがないので、何をやっているかという、利用者と協働して活動しています。利用者といっても先生ではなくて主に学生ですね。学生と図書館職員が協働して何かをする。例えば、学生におすすめの本をポップで書いてもらって展示するとか、あるテーマで図書を選んでそれを展示するとか、藤女子大学出

身の作家というのは何人かいるので、学生と相談してそういう方を呼んで、講演会プラス読書って面白いというような啓蒙活動のようなことをしています。あるいは図書館の広報についてですが、北大などの進んでいるところでは単純にホームページで公開するというだけではなくて、フェイスブックとかを利用して広報をしていますね。館報も誰に向けて発行しているのかよくわからないということになって、これは学生でしょうということになり、大胆にレイアウトも全て変え、難しい論文も載せないようにしたそうです。学生と協働することで利用者を増やすとか図書館の方に目を向けてもらう、そういう活動を一方でしながらも、例えば、今まで図書館に来て冊子で引かなければならなかった参考図書類も、ジャパンナレッジや日本文学ウェブ図書館などデータベースなど色々入っているわけです。それが、研究室とかコンピュータ教室で開けるわけです。そうすると当然図書館には来ません。今までどおりの来館者とか貸出冊数とかそういうものだけの統計にして増えたとか減ったとかを考えるだけの時代ではなくて、ネット上で使われているものもカウントして統計に入れるなどの工夫をしないと今の時代に合わなくなってきたのではないかなあと感じます。このように大学図書館も非常に悩みながら、何かやろうということ色々みんなが情報交換してやっていますけれども、これだ、というのはなかなかないですね。

**丹羽副館長**：そうですね。ありがとうございます。

**樟山会長**：図書館自体は歴史をたどっていくと、貸本屋というところからスタートしているので、どうしてもどれだけ貸したかというのを絶えず一つの指標としてずっと大切にできています。それで、今色々な委員の方がおっしゃっていましたが、指標を変えていかないと、つまり図書館に行ったことでどれだけ満足した情報が得られるかとかそういう指標に変えていかないと、数字で貸出数とか利用者数とかを追っていけば追っていくほど非常に運営は苦しくなるでしょうね。利用者が違うサービスを求めているのではないかと思います。それに追いついていないというか後手になっている状態かなと思います。基本的に段々と情報センター的な役割を図書館が担うというか、図書館は確かに活字情報が中心ですが、私が思うのは情報コンシェルジュみたいな人を置いて、司書だけではなく、司書は図書で特化してもいいのですが、それ以外の情報もこの人に聞けば色々なことを教えてくれる、あるいは情報がもらえるというようなサービスの提供をする人がいることで情報センターの役割を図書館が担っていくことになるのではないかと実感しているところです。

また、学校図書館が充実すると利用が伸びていますよね。すると本館に行かなくなり、当然利用が減ります。ですから、本館の扱いというのは、私はアダルト対象でいいのではないかなと思うのです。特にこれから高齢化していきますよね。当然リタイアした人がその後どのような生活をするかという、やはり知的空間として図書館に行き

な本を読んで一日過ごすとか、音楽もあるでしょうし、そういう空間は必要だと思います。方向性を変えていくと図書館への期待というか活用度というのは高まるのではないかと思いますし、貸出数とかに特化してしまうと非常に狭い議論になってしまうのではないかなと思います。

**河村委員**：満足度というのは非常に重要な視点で、利用者が望んでいる図書館に対する重視度と、それから利用者が受け取っている満足度の観点から言って、利用者が何をどの程度望んでいるのかということ把握してサービスしてあげる必要があります。また、60歳以上の男性というか、特に男性は勤務者であるときには図書館を利用できないでいたものが、定年退職してから、その利用者が図書館に戻ってくるという調査結果も実際に出ていますし、人口構成が変化してきているようなので、やはり図書館としてそのあたりも調査してみると良いと思います。私は石狩というのは非常に満足度の高い図書館として評価しています。利用者からの満足度が非常に高く、自動貸出機もありますし、貸出冊数も無制限ですし、利用者が望んでいることを全て提供しながら貸出冊数が減っているというのは、逆に言うと滞在型の利用ということで、例えば中で軽食が食べられるとか、畳の空間があって長いこと滞在できるだとか、そういうことが影響しているのではないのでしょうか。また、職員に対する満足度も非常に高いです。気持ちよく使わせてもらっているというような利用者の声もありますので、あまり数値で現れていないようなところを何とか数値化する方法を探す、例えば一か月くらい入館の際に紙を渡して、入館と退館の時間を書いて提出していただきたいというのを行うのもいいかもしれません。要はどのくらい満足して使ってもらえているのかということが示せば良いわけで、あんまり貸出冊数にこだわらなくてもいいのかなという気は前からしています。

**丹羽副館長**：ありがとうございます。先ほど、男性の利用が増えているとか滞在時間が増えているとか、河村委員がおっしゃっているように、石狩市民図書館は男女や年齢の統計がとれていないので、印象論しか出せません。平山委員は開館以来ずっと来ていただいているので、少しその辺の印象論をお話いただければと思うのですがどうでしょうか。

**平山委員**：他の人のことはわからないのですが、私は図書館に来て、雑誌など読んでいて、良い空間だなあといいながら、ついついご飯の支度をしなければと思うくらい居心地の良い場所となっています。皆さんおっしゃっていますが、貸出冊数とか人数とか、ではなくて、やはり満足度が重要だと思います。それを説明できる材料があれば、貸出冊数なんかこわくないというか、議会とか資料とかで様々なことを言われて職員の方はお辛いかもしれませんけれども、そうじゃない見方があるということや、利用は減ったかもしれないけれども、満足してくれているということが発表できたらいいなあと思います。

**矢野委員**：せっかくそういう話になっているのですが、図書館としてはそう考えますが、世の中はそうは見ません。例えば、大学は色々なところでランキングづけというのが流行っていて、大学ランキングなんていうのもありますが、その中に図書館部門というのもあります。どういうことでランクづけをしているかという、一年間の貸出冊数の平均とか、購入金額とか購入冊数とか4つくらいの統計を出して、それを指数化して判断するのですが、その中で一番得点が高いのが平均貸出冊数です。私の大学は小さいわりにランクが高いのですが、それはなぜかという、平均貸出冊数が多いということなのです。大きなところは蔵書冊数が多いし貸出冊数も多いのですが、学生の人数で割ると、一人何冊とかになってしまいます。例えば、多い例として国際基督教大学だと平均 60 冊とかになるのですが、世の中はそういう風に数字を見てしまうのです。だから、私たちが予算を増やしてとかお願いする場合、その方が話としては見えるのです。だからと言って、図書館の中の人それがいいのだと思ってしまったらそれは違うと思うのですが。

**河村委員**：貸出冊数を増やしたいのであれば、従来やってきたような、分館とかを身近に作って、滞在しやすくないと言ってしまう言葉が悪いですが、小さくて借りて帰るしか出来ないような 1970 年代の運営にすれば貸出冊数はすごく伸びるでしょうね。先ほどから話が出ているように利用者層が変わってきていて、定年退職してゆったりとした非日常的空間でゆっくり本を読むというくつろぎ方、自分の家にはない空間、夏に行くと涼しく、冬に行くと暖かい、本だけではなくて映画も観られる、音楽も聴ける、インターネットも使えるという本以外のサービスも重視されてきているのではないのかなと思います。本だけじゃないところに図書館に対する満足度を感じている部分もあると思いますので、そこを一回調査してみてもどうでしょうか。経験則的に職員の方はカウンターにずっと立っておられるので、見ていて大体想像がついていると思うのです。統計データをとってないということですが、目に見えてきているので、あとはそれを数値として表現してあげる必要がありますから、試しに一か月くらいどれくらいの時間滞在しているのかを計測してみるのはいくらでも思えます。分析はお手伝いします。

**樟山会長**：利用者のニーズをきちんと把握するというのは必要だと思います。図書館にどういったサービスをしてもらいたいのかというアンケートなどをとって利用者の生の声を聞いていかないと、改善に繋がっていかないと。行政としては予算が絡むので、より質の良いサービスをするのであれば、乱暴な言い方かもしれませんが、最終的にある程度お金をとって利用してもらおうという選択肢も出てくると思います。無料だと限界があると思いますし、しかも図書館に来る人と言うのは特定の人であって、間違いなく人口の半分も来ません。そういう人がサービスを利用しているので、多くの人はサービ

スを楽しんでいないのですよね、基本的に。ですから、少ない金額でいいと思うのですが、徴収して質の高いサービスを提供しますという方策もあるのかなという気がします。

**谷口副会長：**学校図書館で、司書が法制化になるとかならないという話があって、では学校司書の専門性とは何だろうかという話し合いをかなりしているのですが、やはり来たニーズに対して応えるというのは当たり前すぎるのですが、潜在的にある欲求をプロなら読み取れという話がありました。例えば、配架一つとっても、ジュンク堂というのはかなり一人単価が高いです。あれは配架が良いわけですよね。つまり、人は見えないところにも欲求があるわけですから、そのためにプロの司書がいて、石狩市民図書館はプロの司書の方がたくさんいらっしゃるの、多分そういう方が利用者を見てその潜在的にあるものを感じ取っていることもあると思うのです。そこをキャッチしていくことが必要だと思います。もちろん統計をとったりするというマーケティングについて、コンビニでも私は何十代で打たれているのかなあと思う時もあるのですが、多分そういうようなことも図書館でするというのはなかなか難しいと思います。けれども、そういうマーケティングを実際、司書は日常的にやっているはずだと思います。それからボランティアとか市民の方がたくさん来ていらっしゃるのその声を拾って、全部が全部というのは無理だと思うので、実現可能なものをどうするかというのを多分今までもかなりやってきているから顧客満足度も高いと思うのですが、そういうところはプロの力というものをこれから見せつけるところじゃないかなあという気がしています。これだけ完成してしまっている図書館は難しいかもしれませんが、利用者は様々な潜在的な欲求を持っているのではないかなという気がします。学校でもそれは同様で、生徒の動きを見るとか、何を借りているのかなとか、棚を取った手はどこを見ていて、でも向こうに行ったわとか、小さいから出来ることなのですが、多分そういう部分も色々やっていくのが司書の仕事だと思うので、これだけプロフェッショナルの司書がいる図書館ですから、司書の力がこれから大事になっていくと思いますので、そこを強みとしていただきたいと思います。

**河村委員：**石狩市では、過去に住民調査というのをやったことはありますか。性別、年齢、職業等を図書館で把握してなくて、利用者の登録数も減ってきているということで、何十パーセントかわかりませんが、非利用者がいるわけで、普通、調査する時には市の協力が必要なのですが、札幌市では1万人アンケートというのをやっていて、その中に一つ図書館の項目を入れてもらったりしているのですが、図書館独自でやるのではなくて、行政全体として取り組み、図書館を使っていない人がなぜ使っていないのかというのは聞いてみる必要があると思います。それによって、利用者が増えれば貸出冊数も当然増えると思いますし、今までの話でいくと、今まで利用してくれている人にこれ以上何をサービスするかということももちろん大事なのですが限界があるので、まだ使っていない人に対して何を求めているのかどうして使わないのか一回市全体

として何かの機会で開催されるといいかなと思います。北広島市もしましたし、札幌市の1万人アンケートでも、個人情報保護法があって、私たちの研究でもお金がないとできません。住民票の閲覧に一件100円かかる上に件数もおそらく一日十件というように限られているので、行政の力で住民に対するアンケートを行う時に、項目として図書館を使っているか、使っていないなら何で使っていないのかというのを聞いてみると今後一番登録者を伸ばすにはいいのではないかと思います。

**百井館長**：それは可能だと思います。

**寺尾主査**：河村委員からご提案のあったアンケートなのですが、毎年企画課というところで総合的なアンケートをとっております。これまで図書館の項目は一度もなかったのですが、今年度は早めに動いて、まだ内容は決めていないのですが、アンケート項目を入れたいと伝えてあるので、ご意見を参考に色々考えたいと思います。

**樟山会長**：小学校についてなのですが、学校司書を入れていただいて、利用が伸びています。ですが、放っておいても読みません。ではどうやって利用が伸びるかという担任の先生が連れて行くのです。調べ学習とかでまずは強制的に。その中で何人かが、図書館って面白いな、こういう本もあるのだなって思います。そしてリピーターになります。ですから、大人も同じだと思うのです。図書館があるのはわかっていて、一回行ってみたいと思っている人はたくさんいると思います。ですが、なかなかきっかけというものがなくて、いつのまにか行かなくなるということもあると思います。来ている人はリピーターが多いと思います。ですから河村委員がおっしゃったように掘り起こして、今まで利用していなかった人をどう図書館に呼びこむかというところもリサーチと合わせてやっていただくとまた新たな事業も出てくると思いますので、ぜひ検討していただきたいと思います。

ではお時間となりましたので、これで第1回目の協議会は終了させていただきたいと思います。最後に事務局より連絡がございますのでよろしく願いいたします。

**丹羽副館長**：お時間を超過しましたので、お配りした図書館交流事業については、資料をご覧いただければと思います。決まっているのは、調印式を10月27日の朝10時前後に行います。それから、館長から話がありましたが、はだしのゲンが注目されていますけれども、本市においても、やや性的な表現があるということで、こういう本を置くべきではないというお話も来ています。この本は各種の推薦図書にもなっていますし、私たちとしては安易に閉架にするべきではないと考えています。これは心霊探偵八雲という本ですが、こういう本についても今問合せがきています。

平山委員：すみません、そういうのは市民から来るのでしょうか。

丹羽副館長：これは学校図書館で父兄の方からいただいたお話です。

百井館長：実際に市内の学校図書館にある本なのですが、それ自体どうなのかというお話です。

丹羽副館長：はだしのゲンだけではなく、色々な考え方があると思いますけれども、我々も深く考えていかなければならないなと感じております。特に図書館の場合、河村委員や谷口委員はよくご存じだと思いますが、日本図書館協会の図書館の自由に関する宣言、あるいは児童の権利に関する条約などを勘案すると閉架にするというのは相当な理由がないと出来ないなということがあります。その旨を直接ご説明したいなと考えています。最後になりますけれども、皆さん既にご存じでご覧になった方もいるかと思いますが、10月13日に、今年公開された「じんじん」という映画を絵本が題材ということで図書館が中心となり上映会を行います。追ってご連絡差し上げますけれども、北コミュニティセンターにて行いますので、ぜひご参加いただければと思います。以上です。

樟山会長：最後に館長から一言お願いします。

百井館長：ありがとうございました。これまでも図書館について、どのようにしていったらいいのかというようなことで、視点を変えていくつかのご意見をいただいたことも多々あります。特に今日のご意見というのはもう少し踏み込んだ、しかも図書館の評価をどうしていったらいいのかということで実際にお聞きしたいところがお答えいただきました。しかも、言いつばなしではなく、我々と意見を交換させていただいたということで、非常にありがたく思っています。くどいかもしれませんが。我々も一回いただいたものを内部で検討し、更にもう一回皆さまにお出しして、部分的には更に深めていきたいなと思いますので、もう少しお付き合いいただいて、前に向けて進めていきたいと思っております。本当に今日はありがとうございました。

樟山会長：それでは、これで終了いたします。

平成25年 9月26日

会議録署名委員

会長 樟山行彦